

木のアーチと光に守られた、聖なる場所。



礼拝堂は樹齢100年以上の大樹が描く輪の中に建てられた。壁の低い位置に窓が少ないのは、中に差し込む光の入り口を上から集中させるため。

アーチをつくるパネルは米唐檜(ヘイトウヒ)という木材。光沢材は塗らず、白木の質感を生かしている。



敷地の向こうに広がる谷間が最もよく見える場所につくられた出窓。腰を下ろせる折りや読書のスペースとした。



靴ひもを編んだように見える木組みが美しい。各アーチの頂点部は天井に固定され、空間全体が一体となる。



網の目のように複雑に交差する白木のアーチ。その隙間から光が降り注ぐと、木に反射して光が膨らみ、空間がやわらかな輝きに満ちる。

建築家ニール・マクローグリンは語る。

「この礼拝堂はぼんやりしたふたつのイメージから出発した。ひとつは人が集う心地よい空洞。もうひとつは光を求めてふわりと浮かび上がる船だ」

聖書をひも解いて探した、「船」というイメージ

エドワード王礼拝堂はオックスフォード州にある英国国教会の神学校ライボン・カレッジに付属し、敷地内で暮らす聖職者と神学生のコミュニティの中核となる場所だ。マクローグリンは緑豊かな校内の光景をまず目に焼き付け、イメージを模索し始めた。

「リサーチを進める中で出合ったのが、マタイの福音書に書かれているガリラヤ湖の船の中にいるイエスが、嵐の中でも安らかに眠っている場面。そしてもうひとつ、北アイルランド出身の詩人シエイマス・ヒーニーの詩だ。共通するのは「船」だった」

聖書には、船を舞台とした挿話が多々ある。時に信仰の証の場であり、イエスが弟子と集った特別な場だ。シンプルな空間(空洞)に船底の木組みを彷彿させる入り組んだアーチをかぶ

せることで、神に守られた安全な場をつくり上げた。86枚のパネルが対角線をつなぎ、繊細で優美な模様を描く。しかし「浮かび上がる船」とは不思議なイメージだ。

「建設された場所は大樹に囲まれた中にぽっかりあいた土地だ。真上から降りそそぐ光を浴びた時、「浮揚」という言葉が浮かんだ。礼拝堂は神を仰ぐ場だ。天に近づきたいという思いを表すために、空間そのものが浮かび光へ向うような軽さを実現したかった」

上方のガラス窓で360度から光を集める。光とパネル、白い壁が呼吸し合い、一刻ごとに異なる明度を生むが、明度が最大になった時、空間は天とひとつにつながった場所になる。

「このプロジェクトは驚くほどスムーズだった。長い時間を礼拝堂で過ごすシスターたちが私のイメージに共感してくれたことは幸せだった。神聖な場所で彼らとともに過ごした時間がいま、懐かしい」

NEW DESIGN

Edward King Chapel

●Wheatley Road, Oxford, U.K.
☎44(0)186-587-4404
www.rcc.ac.uk/about-us/
edward-king-chapel
※見学は事前に要連絡。



中央の説教台を囲むように椅子が配置された礼拝堂。信仰の場であり、また神を賛美する音楽ホールとしても使われている。光とともに音も満ちる空間だ。